

『枕草子』の手紙考

武藤 那賀子

〔キーワード…①枕草子 ②手紙 ③薄様 ④色紙〕

はじめに

『枕草子』の手紙についての研究は、極めて少ない。岡田ひろみは、『うつほ物語』『枕草子』『源氏物語』の三作品を、〈へ赤〉色の手紙に着眼し、比較することで、『うつほ物語』『枕草子』においては、〈へ赤〉は美点として捉えられているものの、『源氏物語』においては、マイナスな表現をする際に〈へ赤〉が使われていることを指摘した^①。また、江口正一は、作者が人の「まこと」まで美の規準で評価するようになったと指摘し、手紙が教養の尺度であり、人そのもののあらわれであり、また「まこと」がこめられているはずのものであると述べている^②。

平安時代の手紙は、現在に残っていない。ゆえに、その形態や書かれた字の様子などは、同時代に書かれた作品群からのみ、分かる。しかし、こと物語には、実現不可能であるとか考えられないような手紙の遣り取りが多く描かれる。『枕草子』は物語とは違い、一条朝に実際に遣り取りされた手紙が登場すると考えてよいのではないだろうか。もちろん、『枕草子』内に書かれた手紙全てが、実際に遣り取りされた手紙であると断言することはできない。それでも、『枕草子』の手紙を一通り見ていくことで、一条朝で作者の周囲で遣り取りされた手紙に少しでも近づけるのではないだろうか。また『枕草子』には、他の作品に比べ、手紙の善し悪しへの言及が多い。これを踏まえた上で、実際に遣り取りされた手紙を、作者がどのように捉えたのかを、再度見ていく必要があるように思う。本論では、『新編 枕草子』³を使用し、これらの問題に取り組んでいきたい。

一、手紙の善し悪し——形態・紙の種類——

『枕草子』には、手紙の善し悪しを語る段が多くある。また、それらは大きく分けて、以下の三つに分類できるように思う。すなわち、手紙の形態や紙の種類についての言及と、人の行動に対しての批評、そして実際に作者の周辺で遣り取りされた手紙についてである。まず、手紙の形態や紙の種類について見ていく。

①紫紙に棟の花、青き紙に菖蒲の葉、ほそくまきて結び、また白き紙を根してひき結ひたるをかし。いと長き根を文の中に入れなどしたるを見る心地ども、艶なり。(第三七段 節は)

②葡萄染の織物、すべて何も何も紫なる物はめでたくこそあれ。花も糸も紙も。(第八五段 めでたきも)

の

③なまめかしきもの……薄様の草子。柳の萌え出でたるに、青き薄様に書きたる文つけたる。……紫の紙を包み文にて、房長き藤につけたる。小忌の君達も、いとなまめかし。（第八六段 なまめかしきもの）
④いみじう暑き昼中にへいかなるわざをせむと、扇の風もぬるし、氷水に手をひたしもてさわぐほどに、こちたう赤き薄様を唐撫子のいみじう咲きたるに結びつけて取り入れたるこそ、書きつらむほどの暑さ心ざしのほど 浅からずおしはかられて、かつ使ひつるだに飽かずおほゆる扇もうち置かれぬれ。（第一八四段 いみじう暑き昼中に）

⑤うれしきもの……人の破り捨てたる文を継ぎて見るに、同じつづきをあまたくだり見つけたる。……みちのくに紙、ただのも、よき得たる。（第二六〇段 うれしきもの）

⑥御前にて、人々とも、また物仰せらるるついでなどにも、

世の中の腹立たしうむつかしうかた時あるべき心地もせで、ただへいづちもいづちも行きもしなばやんと思ふに、ただの紙のいと白う清げなるによき筆、白き色紙みちのくに紙など得つれば、こよなうなぐさみてへさはれ、かくてしばしも生きてありぬべかんめりゝとなむおほゆる。（第二六一一段 御前にて人々とも）

⑦薄様色紙は白き紫赤き刈安染。青きもよし。（一本二二 薄様色紙は）

①は、五月五日の節日について述べた段である。菖蒲や蓬の匂い、色とりどりの薬玉の紐、女房たちや子供たちの様子を述べた後に、この記述がある。紫の紙に紫の花、青い紙に青々とした葉、白い紙に白い根とい

う、同色の組み合わせが良いとされている。

②は、類聚章段だが、非常に長い段である。「めでたきもの」をいくつもあげ、それについて詳細な言及をしている。その最後の方で、「全て、紫色のものはめでたい」というこの文が出てくる。

③は、「なまめかしきもの」をいくつも挙げた段であるが、五月のものが多くことが特徴である。そのような中で、「柳の萌え出でたるに、青き薄様に書きたる文つけたる」ものが出てくるのも、時節を考えればほぼ一致するといえる。また、ここでも紫の紙と紫の「房長き藤」が出てきている。

④は、どうやっても暑い昼に、たいそう綺麗に咲いた唐撫子につけた赤い薄様の手紙を受け取ると、思わず暑さを忘れて見入ってしまう、とある。赤い紙に赤い付け枝の組み合わせの重要さがうかがわれる。

⑤は、人が破った手紙を拾い、繋げて読めた時の嬉しさについて語っている部分も面白いのだが、ここで注目すべきは、みちのくに紙を良いものとしてしていることである。⑥も、気分の悪い時でも、「ただの紙のいと白う清げなるによき筆、白き色紙みちのくに紙など」を手でできれば、気分も良くなると言っている。

ここまでを見てみると、五月の記述が多いことや、藤原氏との関係が大きく影響していることなどが関係するためかもしれないが、『枕草子』では、主に青い紙と紫色の紙、そして真っ白い紙が良いものとして挙げられており、そこに付けられる植物は、それらの紙の色と同色であることが望ましいとされていることが見えてくる。そのような中で、一例のみ、赤い紙についての記述があるが、この記事があるために、赤い紙の重要さは際立って見える。折節にあった青・紫・白色の手紙とそこに付けられる同色の付け枝と、暑い中でさえもその手紙を書いた人の思いが伝わってくる赤色の手紙は、それぞれ位相は違うものの、作者にとって、特に重要視したいものであったことが分かる。

最後に、⑦を見ると、薄様や色紙は、白・紫・赤・黄色、そしてついでに青も良いとされている。黄色の紙の記述は上記にはなかったため、以下に見ていくことにしたい。

二、手紙の善し悪し——人の行動に対しての批評——

ここでは、手紙に関する、人の行動に対しての批評を見ていく。

- ①人の国よりおこせたる文の物なき。京のをまさこそ思ふらめ、されどそれはゆかしき事どもをも書きあつめ世にある事などをも聞けば、いとよし。人のもとにわざと清げに書いてやりつる文の返事、へ今もて来ぬらむかし、あやしうおそきと待つほどに、ありつる文、立て文をも結びたるをも、いときたなげに取りなしふくだめて上に引きたりつる墨など消えて、「おはしまさざりけり」もしは「御物忌とて取り入れず」と言ひて持て帰りたる、いとわびしくすさまじ。（第二三段 すさまじきもの）
- ②へよろしう詠みたると思ふ歌を人のもとにやりたるに、返しせぬ。懸想人はいかがせむ、それだに、をりをかしうなどある返事せぬは心おとりす。また、さわがしう時めきたる所に、うち古めきたる人のおのがつれづれと暇多かるならひに、昔おぼえてことなることなき歌詠みておこせたる。（第二三段 すさまじきもの）
- ③折からあはれなりし人の文、雨など降りつれづれなる日、さがし出でたる。（第二八段 過ぎにしかた恋しきもの）

④端に立てれば、枕上の方に朴に紫の紙はりたる扇ひろがりながらある。みちのくに紙の畳紙のはそやかなるが、花か紅かすこしにほひたるも、几帳のもとに散りほひたり。(第三四段 七月ばかりいみじう暑ければ)

⑤「返事書かむ」と言ひ合はせ語らふどちは見せ交はしなどするも、いとをかし。人のむすめやむごとなき所々に、御文など聞えたまふ人も、今日は心ことにぞなまめかしき。夕暮のほどにほととぎすの名のりてわたるも、すべていみじき。(第三七段 節は)

⑥扇畳紙など昨夜枕上に置きしかどおのづから引かれ散りにけるを求むるに、暗ければいかでかは見えむ、「いづらいづら」と叩きわたし見出でて、扇「ふたふた」と使ひ懐紙さし入れて、「まかりなむ」とばかりこそ言ふらめ。(第六一段 暁に帰らむ人は)

⑦御むすめ后にておはします、またまだしくても姫君など聞ゆるに、御書の使とてまゐりたれば、御文取り入るるよりはじめ褥さし出づる袖口など、明け暮れ見し者ともおぼえず。(第八五段 めでたきもの)

⑧ねたきもの人のもとにこれよりやるも人の返事も、書きてやりつる後、文字一つ二つ思ひなほしたる。……見まほしき文などを、人の取りて庭に下りて見立てる。いとわびしくねたく思ひて行けど簾のもとにとまりて見立てる心地こそ、飛びも出でぬべき心地こそすれ。(第九二段 ねたきもの)

⑨あさましきもの……見すまじき人に、外へ持て行く文見せたる。(第九四段 あさましきもの)

⑩しばしありて、式部丞なにがし御使にまゐりたれば、御膳やどりの北に寄りたる間に褥さし出だしてすゑたり。御返答はとく出ださせたまひつ。まだ褥も取り入れぬほどに、春宮の御使に周頼の少将まゐ

りたり。御文取り入れて、渡殿はほそき縁なれば、こなたの縁にこと褥さし出だしたり。御文取り入れて、殿上宮など御覧じわたす。「御返し、はや」とあれどとみにも聞えたまはぬを、「なにがしが見はべれば書きたまはぬなめり。さらぬをりは、これよりぞ聞もなく聞えたまふなる」など申したまへば、御面はすこし赤みてうちほゑみたまへる、いとめでたし。「まことにとく」など上も聞えたまへば、奥に向きて書いたまふ。上近う寄りたまひてもろともに書かせたてまつりたまへば、いとどつつましげなり。（第一〇一段 淑景舎春宮にまゐりたまふほどの）

⑪言ひにくきもの 人の消息のなかによき人の仰せ言などのおほかるを、はじめより奥まで言ひにくし。はづかしき人の、物などおこせたる返事。（第一〇七段 言ひにくきもの）

⑫胸つぶるるもの……昨夜来はじめたる人の今朝の文のおそきは、人のためにさへつぶる。（第一四五段 胸つぶるるもの）

⑬心もとなきもの……遠き所より思ふ人の文を得て、かたく封じたる続飯などあくるほど、いと心もとなし。（第一五五段 心もとなきもの）

⑭好き好きしくて人かず見る人の、夜はいづくにかありつらむ、暁に帰りてやがて起きたる、ねぶたげなるけしきなれど 硯取り寄せて墨こまやかに押し磨りて、事なしびに筆にまかせてなどはあらず、心とどめて書くまひろげ姿も、をかしう見ゆ。（第一八三段 好き好きしくて人かず見る人の）

⑮笛は……暁などに、忘れてをかしげなる、枕のもとにありける 見つけたるも、なほをかし。人の取りにおこせたるをおし包みてやるも、立て文のやうに見えたり。（第二〇六段 笛は）

⑯物へ行く道に、清げなるをこの細やかなるが 立て文持ちて急ぎ行くこそ、へいづちならむと見ゆ

れ。

また、清げなる童べなどの、粕どものいとあざやかなるにはあらで萎えばみたるに、履子のつややかなるが、齒に土おほくつきたるをはきて、白き紙に大きに包みたる物、もしは箱の蓋に草子どもなど入れて持て行くこそ、いみじう呼び寄せて見まほしけれ。(第二二段 物へ行く道に)

⑰ 文言葉なめき人こそ、いとにくけれ。

世をなのめに書きながしたる言葉のにくきこそ。さるまじき人のもとにあまりかしこまりたるも、げにわろき事なり。されど、わが得たらむはことわり、人のもとなるさへにくくこそあれ。……(第二四六段 文言葉なめき人こそ)

①は、地方から送ってきた手紙と京から送った手紙について述べた前半と、丁寧にかいた手紙が、見るも無残になって返事もなく返ってきた後半に分けられる。前半部分では、地方のみやげ物と京での出来事が、等しいものとして捉えられており、地方からの手紙にはみやげ物をつけるべきだと作者は主張する。後半部分では、綺麗に書いた手紙が、長時間にわたって人の手で持たれていたために、見た目が悪くなってしまったことを嘆いている。②は、返事をしない人や、今めいているところに古めかしい歌を詠む人がよろしくないと述べている。③も返事がなかなかこないという部分で同様である。

③は、「折からあはれなりし人の文」が、あたかも物語のように読まれていることが伺える場面である。

④は、女性の部屋を覗いた男性の様子が描かれている。枕上に広げたまま置いてある紫の紙を貼った扇と、薄藍色か紅色かわからないが、細いみちのくに紙の畳紙が印象的である。

⑤は、前節の①に挙げた場面の続きである。恋の始まりを描くこの場面は、手紙によってつながる、差出人と受取人だけではなく、その周辺の人物たちの情景も描いており、作者は、それを微笑ましく見ている。

⑥は、女のところを訪ねていた男が、暁に出る仕度をする場面であり、枕元においてあつた畳紙を懷に入れている場面である。情趣のかけらもない男性の仕草が面白みをもって描かれており、畳紙を持つところで、準備が終わるあたり、作者の抜け目ない観察が分かる。これと対照的なのが、⑮である。暁に出ていった男が枕元に笛を忘れた場面である。笛を紙に包んで返すその様子が、立て文のように見えて面白いと作者は述べる。畳紙すら忘れないつれない男と、笛を忘れてしまい、取りに来る男が対照的に見える。

⑦は、一般的な手紙の使いではなく、天皇からの手紙の使いとなった藏人についての言及である。作者は藏人の立場になって、待遇の良さ、服の色の悪さなどに思考を巡らせている。

⑧は、人にあげた文に対して、「こうすれば良かった」と後悔する場面と、見たいと思った文を他の人が取って、作者が手を出せない庭にまで出て読んでいるのは、飛び出してでも読みたいものだと思える場面である。自分の手の届かないところにある手紙に対する歯がゆさが描かれている。⑨も、他人が関わる場面である。見せるべきではない人に手紙を見せてしまったという。⑧⑨はいずれも、手紙の秘儀性についても考えさせられる部分である。また、⑬は手紙を見たいという気持ちの逸る場面を描いており、見たい手紙がなかなか見られないじれったさが、⑧に通じる。また、⑯は、「立て文」や「白き紙」に包まれたものの中身を知りたいという心境が描かれており、これらは、手紙を見たいという心境に通じる。

⑩は、天皇と東宮からほとんど時間を空けずに、定子の元に手紙が来た場面を描いている。天皇と東宮からの手紙を大勢で見ている様が描かれ、華やかな印象である。

⑪は、女房ならではの悩みを叙述した場面である。⑭は、女の元から帰った男が、眠りもせずにそのまま、心をこめて手紙を書くさまを取り上げ、素晴らしいと評価している。

⑰は、手紙の言葉遣いに対する批評である。自分よりも身分の低いところに送る手紙にかしこまった言葉を使うのも良くないが、それでも不躰なよりは良いと述べる。

以上のように見てみると、作者は、和歌だけの手紙や恋文に焦点を合わせて手紙を論じることとは少なく、むしろ自分の仕事先での人間関係に視線を向けていることが多いと分かる。しかし、第三者に目を向けたときのみ、恋文に視線を向けていることも注目に値する。そして、この場合には、手紙の内容というよりは、その手紙を書く人、読む人の動作に着目していると言えるだろう。

三、実際に作者の周辺で遣り取りされた手紙

前節までは、作者が遣り取りしたのではない手紙、間近では見ていない手紙について述べている場面がほとんどであった。ここで取り上げるのは、実際に作者が遣り取りした、もしくは、作者が女房という立場上、極めて間近で見ていたと考えられる手紙である。

①菩提といふ寺に結縁の八講せしに詣でたるに、人のもとより「とく帰たまひね、いとさうさうし」と言ひたれば、蓮の葉のうらに

もとめてもかかるはちすの露を置きてうき世にまたはかへるものかは

と書きてやりつ。まことにいとたふとくあはれなれば、やがてとまりぬべくおぼゆるに、さうちうが家の人のもどかしさも忘れぬべし。（第三二段 菩提といふ寺に）

②「朝顔の露落ちぬさきに文書かむ」と道のほども心もとなく、「麻生の下草」など口ずさみつつわが方に行くに、……霧の絶え間見えぬべきほど、いそぎつる文もたゆみぬこそ、うしろめたけれ。

出でぬる人も、へいつのほどにか」と見えて萩の露ながらおし折りたるに付けてあれど、えさし出でず。香の紙のいみじうしめたる匂ひ、いとをかし。あまりはしたなきほどになれば立ち出でて、へわがおきつる所もかくや」と思ひやらるるも、をかしかりぬべし。（第三四段 七月ばかりいみじう暑ければ）

③「ただここもとに人づてならで申すべき事なむ」と言へばさし出でて問ふに、「これ、頭の殿の奉らせたまふ。御返事とく」と言ふ。へいみじくにくみたまふにいかなる文ならむ」と思へど、ただ今いそぎ見るべきにもあらねば、「往ね、今聞えむ」とて懷に引き入れてなほなほ人の物言ふ聞きなどする、すなはち帰り来て「『さらばそのありつる御文を給はりて来』となむ仰せらるる。とくとく」と言ふがあやしう、へいせの物語なりや」とて見れば青き薄様にいと清げに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。（第七九段 頭中将のすずなるそら言を）

④夜いたうふけて門をいたうおどろおどろしう叩けば、へ何の、かう心もなう、遠からぬ門を高く叩くらむ」と聞きて問はすれば、滝口なりけり。「左衛門の尉の」とて文を持って来たり。みな寝たるに火取りよせて見れば、

明日 御読経の結願にて、宰相の中將 御物忌に籠りたまへり。「いもうとのあり所申せ申せ」と責

めらるるに、ずちなし。さらにえ隠し申すまじ。「さなむ」とや聞かせたてまつるべき。いかに。仰せにしたがはむ。

と言ひたる、返事は書かで、布を一寸ばかり紙に包みてやりつ。

さて、後来て、

一夜は責めたてられて、すすろなる所々になむ率てありきたてまつりし。まめやかにさいなむに、いとからし。……

と言ふ。へいささか心も得ざりけるゝと見るがにくければ、物も言はで硯にある紙の端に、

かづきするあまのすみかをそことだにゆめいふなとやめをくはせけむ

と書きてさし出でたれば、「歌詠ませたまへるか、さらに見はべらじ」とて扇^マぎ返して逃げて往ぬ。(第八一段 里にまかでたるに)

⑤局へいとく下るれば、侍の長なる者、柚の葉のごとくなる宿直衣の袖の上に青き紙の松につけたるを置きて、わななき出でたり。「それはいづくのぞ」と問へば「齋院より」と言ふに、ふとめでたうおぼえて取りて参りぬ。まだ大殿籠りたれば、まづ御帳にあたりたる御格子を基盤などかき寄せて一人念じあぐる、いとおもし。片つ方なればきしめくに、おどろかせたまひて「などさはする事ぞ」とのたまはすれば、「齋院より御文のさぶらふには、いかでかいそぎあげはべらざらむ」と申すに、「げにいと疾かりけり」とて起きさせたまへり。御文あけさせたまへれば、五寸ばかりなる卯槌二つを卯杖のさまに頭などを包みて、山橘日陰山菅などうつくしげに飾りて、御文はなし。「ただなるやうあらむやは」とて御覧ずれば、卯杖の頭包みたる小さき紙に、

山とよむをのの響きをたづぬればいはひのつゑの音にぞありける

御返し書かせたまふほども、いとめでたし。（第八四段 職の御曹司におはしますころ西の廂に）

⑥二十日まゐりたるにも、まづこの事を御前にても言ふ。「身は投げつ」とて蓋のかぎり持て来たりけむ法師のやうにすなはち持て来しがあさましかりし事、物の蓋に小山作りて白き紙に歌いみじう書きてまゐらせむとせし事など啓すれば、いみじく笑はせたまふ。（第八四段 職の御曹司におはしますころ西の廂に）

⑦いささかなる御文を書きて投げ給はせたり。見れば、

元輔がのちといはるる君しもやこよひの歌にはづれてはをる

とあるを見るに、をかしき事ぞたぐひなきや。いみじう笑へば、「何事ぞ、何事ぞ」と大臣も問ひたまふ。（第九六段 五月の御精進のほど）

⑧御方々君達上人など御前に人のいとおほくさぶらへば、廂の柱に寄りかかりて女房と物語などしてゐたるに物を投げ給はせたる、あけて見たれば「思ふべしやいなや、人第一ならずはいかに」と書かせたまへり。（第九八段 御方々君達上人など）

⑨二月つごもりごろに、風いたう吹きて空いみじう黒きに雪すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿寮来て「かうしてさぶらふ」と言へば寄りたるに、「これ公任の宰相殿の」とてあるを見れば、懷紙にすこしはある心ちこそすれ

とあるは、げに今日のけしきにいとようあひたるも、へこれが本はいかでかつくべからむと思ひわづらひぬ。（第一〇三段 二月つごもりごろに）

⑩頭弁の御もとより主殿司、絵などやうなる物を白き色紙に包みて、梅の花のいみじう咲きたるにつけて持て来たり。へ絵にやあらむといそぎ取り入れて見れば、「餅餠」といふ物を二つならべて包みたるなりけり。添へたる立て文には解文のやうにて、

進上

餅餠一包

例に依て進上如件

別当 少納言殿

とて月日書きて、「みまなのなりゆき」とて、奥に「このをのこはみづからまゐらむとするを、昼はかたちわろしとてまゐらぬなめり」と、いみじうをかしげに書いたまへり。……返事をいみじう赤き薄様に「みづから持てまうで来ぬ下部は、いと冷淡なりとなむ見ゆめる」とて、めでたき紅梅につけて奉りたる……(第一二八段 二月宮の司に)

⑪頭弁の、職にまゐりたまひて物語などしたまひしに、夜いたうふけぬ。「明日御物忌なるに籠るべければ、丑になりなばあしかりなむ」とてまゐりたまひぬ。つとめて、藏人所の紙屋紙ひき重ねて、

今日は残りおほかる心地なむする。夜をとほして昔物語も聞え明かさむとせしを、鶏の声にもよほされてなむ。

といみじう言おほく書きたまへる、いとめでたし。……(第一三二段 頭弁の職にまゐりたまひて)

⑫円融院の御果ての年皆人御服ぬぎなどして、あはれなる事をおほやけよりはじめて院の御事など思ひ出づるに、雨のいたう降る日、藤三位の局に蓑虫のやうなる童の大きな、白き木に立て文をつけて

「これ奉らせむ」と言ひければ、「いづこよりぞ、今日明日は物忌なれば葎もまゐらぬぞ」とて下は立てたる葎より取り入れて、「さなむ」とは聞かせたまへれど「物忌なれば見ず」とて上についさして置きたるを、つとめて手洗ひて「いで、その昨日の巻数」とてこひ出でて伏し拝みて開けたれば、胡桃色といふ色紙の厚肥えたるをへあやしと思ひて開けて行けば、法師のいみじげなる手にて

これをだにかたみと思ふにみやこには葉がへやしつる椎柴の袖……（第一三三段 円融院の御果ての年）

⑬内の御物忌なる日、右近の将監みつなにかやいふ者して畳紙に書いておこせたるを見れば、……（第一五六段 故殿の御服のころ）

⑭みあれの宣旨の、上に、五寸ばかりなる殿上童のいとをかしげなるを作りてみづら結び装束などうるはしくしてなかに名書きて奉らせたまひけるを、「ともあきらのおほ君」と書いたりけるを、いみじうこそ興せさせたまひけれ。（第一七七段 みあれの宣旨の）

⑮さても誰か、かくにくきわざはしつらむ。おほかたへ心づきなしとおぼゆれば、さるをりも押しししきつつあるものを。まいてへいみじ、にくしと思へど、まだうひうひしければともかくもえ啓し返さで、明けぬれば下りたるすなはち、浅緑なる薄様に艶なる文を「これ」とて来たる、あけて見ればいかにしていかに知らましいつはりを空にただすの神なかりせば
となむ御けしきは。……（第一七八段 宮にはじめてまゐりたるころ）

⑯「細殿に便なき人なむ、暁に傘さして出でける」と言ひ出でたるを、よく聞けばわが上なりけり。地下などいひても目やすく、人にゆるさるばかりの人にもあらざるを、へあやしの事やと思ふほどに、

上より御文持て来て「返事ただいま」と仰せられたり。へ何事にかゝとて見れば、大傘の絵をかきて、人は見えずただ手の限りをとらへさせて、下に

山のはあけしあしたより

と書かせたまへり。

なほはかなき事にてもただめでたくのみおぼえさせたまふに、へはづかしく心づきなき事はいかでか御覧ぜられじと思ふにかかるそら言の出で来る、苦しけれどをかしくて、こと紙に雨をいみじう降らせて、下に

ならぬ名のたちにけるかな

さてや濡れ衣にはなりはべらむ

と啓したれば、右近の内侍などに語らせたまひて笑はせたまひけり。(第二三段 細殿に便なき人なむ)

⑰三条の宮におはしますころ五日の菖蒲の輿など持てまゐり、薬玉まゐらせなどす。若き人々御匣殿など薬玉して、姫宮若宮につけたてまつらせたまふ。いとをかしき薬玉どもほかよりまゐらせたるに、「青ざし」といふ物を持て来たるを、青き薄様を艶なる硯の蓋に敷きて、「これませ越しにさぶらふ」とてまゐらせたれば、

みな人の花や蝶やといそぐ日もわが心をばきみぞしりける

この紙の端を引き破らせたまひて書かせたまへる、いとめでたし。(第二四段 三条の宮におはしますころ)

⑱ 清水に籠りたりしにわざと御使して給はせたりし、唐の紙の赤みたるに草にて、

山ちかき入あひの鐘のこゑごとにこふるこころの数はしるらむものを、こよなの長居や

とぞ書かせたまへる。

紙などのなめげならぬも取り忘れたる旅にて、紫なる蓮の花びらに書きてまゐらす。（第三二六段 清水に籠りたりしに）

⑲ 御文は、大納言取りて殿に奉らせたまへば、引き解きて「ゆかしき御文かな、ゆるされはべらば開けて見はべらむ」とはのたまはすれど、「あやふしとおぼいためり。かたじけなくもあり」とて奉らせたまふを、取らせたまひてもひろげさせたまふやうにもあらずもてなさせたまふ御用意ぞ、ありがたき。御簾のうちより女房褥さし出でて、三四人御几帳のもとにゐたり。「あなたにまかりて、祿の事ものしはべらむ」とて立たせたまひぬる後ぞ、御文御覧する。御返し紅梅の薄様に書かせたまふが、御衣の同じ色にほひかよひたる、へなほかくしもおしはかりまゐらす人はなくやあらむとぞくちをしき。「今日のはことさらに」とて、殿の御方より祿は出ださせたまふ。女の装束に紅梅の細長そへたり。（第三二六二段 関白殿二月二十一日に）

⑳ 月のいみじう明かき夜、紙のまたいみじう赤きにただ「あらずとも」と書きたるを、廂にさし入りたる月にあてて人の見しこそ、をかしかりしか。雨降らむをりは、さはありなむや。（第二七六段 成信の中将は入道兵部卿の宮の御子にて）

㉑ 常に文おこする人の「何かは。言ふにもかひなし、今は」と言ひてまたの日音もせねば、さすがに明けたてばへさし出づる文の見えぬこそ、さうざうしけれと思ひて、「さてもきはきはしかりける心か

な」と言ひて暮らしつ。

またの日、雨のいたく降る昼まで音もせねば、「むげに思ひ絶えにけり」など言ひて端の方にゐたる夕暮に、傘さしたる者の持て来たる文を常よりもとく開けて見れば、ただ「水増す雨の」とある、いとほく詠み出だしつる歌どもよりもをかし。

今朝はさしも見えざりつる空の、いと暗うかき曇りて雪のかきくらし降るに、いと心細く見出だすほどもなく白う積りてなほいみじう降るに、随人めきて細やかなるをのこの、傘さしてそばの方なる堀の戸より入りて文をさし入れたるこそ、をかしけれ。いと白きみちのくに紙白き色紙の結びたる上に引きわたしける墨の、ふと氷りにければ裾薄になりたるを開けたれば、いと細く巻きて結びたる巻目はこまごまとくぼみたるに、墨のいと黒う薄くくだり狭に裏表書き乱りたるをうち返し久しう見るこそ、へ何事ならむ」とよそにて見やりたるも、をかしけれ。まいて、うちほほゑむ所はいとゆかしけれど、遠うゐたるは黒き文字などばかりぞへさなめり」とおほゆるかし。

額髪長やかに面様よき人の暗きほどに文を得て、火ともすほども心もとなきにや、火桶の火を挟み上げてたどたどしげに見ゐたるこそ、をかしけれ。(第二七七段 常に文おこする人の)

②そのころ、また同じ物忌しにさやうの所に出で来るに二日といふ日の昼つ方、いとつれづれまさりてただ今もまゐりぬべき心地するほどにしも、仰せ言のあればいとうれしくて見る。浅緑の紙に、宰相の君いとをかしげに書いたまへり。……(第二八四段 三月ばかり物忌しにとて)

①の「蓮の葉」は、本物の蓮の葉に文字を書いたとも取れるが、能因本では「蓮の花びら」となっており、

散華用の紙とも取れる。蓮の葉であった場合でも、作者は瓜に顔を描くといったこともするので違和感はない。また、⑮は、この場面と同様の設定である。寺に籠った作者のもとに、定子から手紙が来たので、散華用の紫色の蓮の花びらに返事を書いたとある。ここで注目すべきは、①では何のことわりもなく蓮の葉（もしくは散華用の紙）に返事を書いたとあるが、⑮では、「紙などのなめげならうも取り忘れたる旅にて」とことわりを入れてある点である。確かに、散華用の紙は本来、手紙用の紙ではないものの、このことわりの有無から、散華用の紙に文字を書くことが一般的ではなかったことが伺える。また、紙の色に着目すると、作者がほとんど取り上げてこなかった赤い紙がここで出て来ていることに気付く。赤い紙については、他の用例も見た上で検討したい。また、①を、本物の蓮の葉に文字を書いたと取った場合は、⑭に通じるものがある。⑭は、みあれの宣旨が、天皇に、殿上童の形をした人形の中に「ともあきらのおほ君」と書いて贈ったという場面である。ともに、紙以外のものに文字を書いて贈ったという部分が共通しており、『うつほ物語』を連想させる場面になっている。

②は、女の元からの帰り道に、別の女の部屋を覗いた男の様子が描かれた場面である。一晚泊まった女性に、すぐにでも手紙を書こうと思っていたが、思いのほか時間がかかってしまい、後朝の文が遅くなってしまう男とは対照的に、この男が覗いた女のところにいたであろう男からは、「萩の露ながらおし折りたるに」香を焚きしめた後朝の文を付けて送られてきた。それを見た最初の男は、自分が出てきた女のところもこうであるのかと考え、その様子を、作者は趣深いと賞すのである。

③は、藤原齊信が作者と仲違いしている際に送ってきた手紙である。返事を急かした手紙の内容は省略するが、「青き薄様にいと清げに書」かれた手紙は、まるで恋文のようであるのに、作者は「心ときめきしつるさ

まにもあらざりけり」と一蹴する。

④は、作者が里籠りしていた際に、作者の居所を知っていた橘則光と作者との間の文の遣り取りを描いたものである。作者と則光の意思疎通がなかなか成立しないところに面白みがあるが、作者の返事の仕方が粹である。また、作者が和歌を書けば、その紙を扇で扇いで、「見ない」という意思表示をする則光の行動も滑稽である。『枕草子』では、機知に富んだ遣り取りが多く描かれ、それを理解する人間の登場が必要となってくるが、則光は、その枠に当てはまらない、作者からすれば駄目な人間として位置づけられよう。

⑤は、松につけた青い手紙が、侍の長の宿直衣の濃緑の袖とあたかもセットであるかのように描かれている。この場面は、意識的に手紙の使となった人物の存在を際立たせているように思われる。齋院からの手紙には文字はなく、ただ、「五寸ばかりなる卯槌二つを卯杖のさまに頭などを包みて、山橘日陰山菅などうつくしげに飾」られているばかりである。そして、卯杖の頭を包んでいた小さな紙には和歌があり、作者は、その贈り物を素晴らしいものとして見ている。また、齋院への返事を書く定子の様子も、この後に描かれている。

⑥は、「身は投げつ」の言葉通り、実はなく、蓋だけを用い、そこに雪で小山を作って、雪に合わせた白い紙に歌を書いて定子に渡したという場面である。この場面は、作者が『うつほ物語』を好きだったということを示す場面だとも言えそうな場面である。

⑦⑧は、ともに、定子が文字を書いた紙を投げてよこした場面である。紙の種類などは一切書かれていないこと、作者を高く評価していることをうかがわせる内容であることが、一致している。⑨は、有名な段であるが、完結にまとめると、作者の機智を述べた段である。⑩も、自賛の段である。行成から、梅の花をつけた、白い紙に包まれた「餅餠」が贈られてきた。作者は、赤い薄様に紅梅をつけて返事をするが、それに対し、行

成は自ら来て、作者にさまざまなことを言うが、述べた内容が則光やなりやすのようだと笑っておしまいになったという。⑪は、作者と行成の歌の応酬である。薄黒い紙屋紙に書かれた行成の和歌を発端とし、何度か作者と行成の間で和歌の遣り取りがされるが、それがいつの間にか他人の手に渡り、広まってしまったという。前節⑨では、「あさましきもの……見すまじき人に、外へ持て行く文見せたる。」とあったが、これは、「見すまじき人」たちではなかったために、「あさましきもの」ではなく、むしろ喜ばしいことであつたようである。

⑫は、定子と一条天皇の戯れである。手紙の出所を偽る場合には、手紙の形式はもちろんだが、使も仕立て上げる必要がある、また、筆跡も偽る必要があると分かる。また、ここでは、一見白い木に白い紙を巻いて巻数のように仕立てた文が、開けてみると胡桃色であつたことも注目に値しよう。手紙の様子から、一般的な巻数が伺え、また、手紙の出所を偽る際に行なう細工などが細かに語られ、興味深い段である。

⑬は、作者のところに、宣方から畳紙に書かれた手紙が来たという場面である。

⑮は、作者が宮仕えし始めたばかりのころの記事である。作者が、定子を大事に思っていると述べたところ、誰かがくしゃみをし、そのために作者の言は嘘だと言って、定子は奥に入ってしまった。しかし、夜明けに局へ下がった後、薄緑の薄様の素晴らしい手紙が定子から来て、作者は一安心したとある。

⑯は、作者に関する噂が広まってしまった場面である。暁に傘をさした男が作者の部屋から出ていったという噂を指し、定子は、大傘の絵を書いて、そこに書いた和歌に朝からの意を込め、噂について作者に尋ねる。それに対し、作者は、雨の絵をたくさん書いて、濡れ衣だと答える。文字だけではなく、絵を取り入れての遣り取りが興味深い段である。

⑰は、端午の節会の際に、定子の元に贈られてきた青ざしを、作者が青い薄様を硯の蓋に敷いて献上した場

面である。定子は、作者が用意した青い薄様に、返事を書いていく。

⑮は、天皇からの手紙を伊周が受取り、道隆が読んで定子に渡すものの、定子は道隆がいなくなるまで読まず、その後に返事を書くという場面である。天皇からの手紙がどのようなものであったかは分からないが、定子は返事を、紅梅の薄様に書いている。その薄様の色と、定子の着る衣の色が合っていて美しく、また、道隆から出された手紙の使への緑は、紅梅の細長であったという。全て紅梅で合わせているところに、作者はめでたさを感じているようである。

⑯は、作者が、雨夜に男が来るのよりも、月の明るい晩や雪の夜、風の夜に男が訪れる方が素晴らしいと述べている記事である。赤い紙に書かれた和歌を、月の光に当てて読む女房の姿を見て素晴らしいと言う。ここでも、恋文は赤い紙に書かれたものが良いように受け取れる。

⑰では、前段とは打って変わって、雨の日に来る手紙が良いと述べている。雪の日に来る手紙が良いとも述べている。一節でもみたが、真っ白い紙がやはり良いと作者は述べる。続く場面では、手紙の詳細な様子が語られ、それを見る女房の様子が語られる。さらに、暗くなった時分に来た手紙を、早く読みたい気持ちから微かな明かりでなんとか読んでいる女房のさまも描かれる。

⑱は、物忌で定子と離れたところにいた作者の元に、定子から手紙がきた場面である。宰相の君の代筆で、浅緑の紙に書かれたものであることが書かれる。

以上のように見えてきて、一つ気づくことがある。作者は、人から来た手紙の詳細を語り、人に来た手紙を語り、またそれを見る人の様子を語る。しかし、自分から出す手紙については、多くを語らない。たとえば、自身がどのような紙を使ったのか、ということに関して述べているのは、①⑱の、蓮の葉や蓮の花びらの形をし

た紙だけである。一節から見てきたが、薄様や色紙は青・紫・白・赤・黄色が良いとして（『枕草子』には黄色の紙が出てこない）おり、また、赤い紙への思い入れもかなり強い。それにもかかわらず、自身がこれらの色の紙を使用したということを一切書かないのである。思うに、作者は手紙の受取人としての自身と差出人としての自身が大きく分かれていたのではないか。受取人として見る際には手紙に使用される紙やその形態、折枝付け枝に注意が向くが、差出人として手紙を見る際には、内容ばかりに目がいつてしまっている。故に、既に出してしまった手紙に対し、文字を一つ二つ変えればよかったと述べるのである（ねたきもの）。また、それら二つの面とは別に、他人が手紙を受け取る場面を幾度となく目撃し、その手紙を読みたいと強く願ったり、遠目に見たり、また、手紙を読む人物をこと細かく観察している。どのような手紙が誰から誰に來たのかを知りたいと強く思うことは、情報を獲得したいという願望である。これは、地方の手紙にはみやげ物をつけるべきだが、京からの手紙には情報がたくさんあるからみやげ物はいらないう、作者の考え方に通じるものがある。このように考えると、作者の手紙に対する考え方は、首尾一貫していると捉えることができるのではないだろうか。

おわりに

作者が、青・紫・白色の紙が良いと述べている段がいくつかあることは確認した。また、数は少ないものの、赤い紙に書かれた恋文が良いという主張が、特に強くなされていたことも確認した。さらに、作者が多くの手紙を目にし、それらについて様々なことを述べはするものの、自身が書く手紙については多くを語らない

ことから、作者は『枕草子』という作品において、手紙の受取人としての自身と差出人としての自身が大きく分かれていたのではないかということを、前節で指摘した。『枕草子』は異同が多く、段によつては内容が大きく変わってしまう作品である。しかし、ここまでに見てきた内容は、動かぬ事実として認識して良いのではないか。

多くの手紙を見てきた作者が、手紙に使用される紙について言及する場面を改めて見てみると、白い紙の貴重さ、青い紙や紫色の紙の趣深さ、赤い紙の情熱を示す度合いが見えてくる。これらのことは、たとえば、

陪膳つかうまつる人のをのこともなど召すほどもなく、わたらせたまひぬ。「御硯の墨すれ」と仰せらるるに、目はそらにて、ただおはしますをのみ見たてまつれば、ほどど継ぎ目もはなちつべし。白き色紙押したたみて「これにただ今おぼえむ古き事、一つづつ書け」と仰せらるる。(第二一段 清涼殿の丑寅のすみの)

といった例を見る際にも有効である。すなわち、わざわざ「白き」と書くことにより、定子が、貴重な白い紙を女房たちに配ったことが分かり、それだけで、定子のサロンが栄えていると読むことができるのである。『枕草子』において、このような読み方をしていくことは一つの有用な方法にはならないだろうか。

注

- (1) 岡田ひろみ「赤い色の手紙―『うつほ』『枕草子』と『源氏物語』」(『文学芸術』第三四号、共立女子大学総

- 合文化研究所、二〇一一・二）。
- （2）江口正一「枕草子の手紙」（『古美術』七、三彩社、一九六五・一）。
- （3）津島知明・中島和歌子『新編 枕草子』（おうふう、二〇一〇）。なお、本論において『枕草子』とは、全て右の本を指す。

Some Thoughts on Letters in *Makuranososhi*

MUTO, Nagako

No letters written in the Heian period have been preserved and we cannot see them today. So, the only means to confirm, though indirectly, form of letters or hands of characters is to see letters in literary works written in the period.

Among such works the tales are not suitable because many of letters in them are unreal.

Makuranososhi is an essay and so it is estimated that letters in it would have been really exchanged in Ichijo Age. Of course it is not certain. But examining all letters in the essay will bring us close to letters of the Age.

At the same time, the author evaluated letters more frequently in the essay than other literary works in the period. So it will be also useful to inquire how she evaluated letters in the essay because such evaluations will reflect those to real letters by her.

The author did not mention the contents of letters and focused on the relationships between characters that could be seen from the contents of letters. When she focused on a person who did not correspond, she paid attention to the behaviors of those who wrote or received the letter.

She described little when a letter was written by herself. For example, although she made reference to colors of Usuyo and letter papers and said blue, purple, white, red and yellow are good, she did not write the color of the paper she used. The reason might be that her attention to a letter differed when she sent or received. When seeing as a recipient, her attention turned to the paper, its form and attachment branch. But as a sender, she saw only contents of the letter.

The author would have seen many letters. And seeing the scene she mentioned the paper used for letters, it becomes clear that she felt worth on preciousness of white paper, attractive depth of blue and purple, and passion of red. So, for

example, when we read “Seiryoden no Ushitora no sumi no”, we can realize the prosperity of the Teishi salon because Teishi distributed white paper. It is expected that this way of reading will add a useful method to elucidate the text of the Makuranososhi.

（人文科学研究科日本語日本文学専攻 博士後期課程三年）